

陳舜臣さんを語る会通信

NO.126 Oct. 2024

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel.078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2024年10月10日

<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

陳舜臣『北京の旅』

本号では、『北京の旅』(1978 平凡社)を取り上げました。『北京の旅』は、ほぼ5年前、「みんなで読もう陳舜臣」の例会の課題図書だった作品で、既に本通信で発行済みと勘違いしておりました。

「私は北京というまちが好きです」(1978年10月、『北京の旅』初版あとがきより)

■芥川竜之介を「北京酔い」と揶揄したが、では、陳さんは？ (下線は編集委員の加筆)

この七年来、毎年のように中国を旅行していますが、そのたびに私はどうぜん何日か北京に滞在しました。しかし、その日数をぜんぶあわせても、それほど長くはならないでしょう。そんな私が北京のことを書くのは、おこがましいと思いますが、北京を愛する私の気持ちが、じっさいの日数をふくらませてくれるでしょう。

下線部分、表にしたものを下にあげました。

1972	9月29日、日中共同声明(日中国交回復)
	10月6日、初めての中国旅行。身分は日本赤十字社に証明してもらって行く。母を伴い、香港、深圳、広州、長沙、南京などを訪ね、 北京では 、1950年代に祖国建設の情熱に燃えて中国に渡り、北京放送で放送記者をしていた妹の妙齡に会い、西安では半坡博物館を訪ねたりした
1973	8月～9月。日中間の空路はまだ開かれていなかったの、香港から入る。この旅を機に、中華人民共和国籍取得。以後、台湾に入れなくなる。新疆行きを希望するが 北京で足止め をくう。中日友好協会会長廖承志の口ききで希望は実現。西安、蘭州、ウルムチ、トルファン、ベゼクリフ、酒泉など憧れの地を初めて歩く
1974	9月。香港から深圳、 北京 、大連、陽泉、延安、西安、乾陵、鄭州、南京、蘇州(虎丘)、揚州、杭州(銭塘江、六和塔など)、上海などを旅する
1975	8月、家族4人での旅。 北京 、西安、酒泉から車で敦煌へ。蘭州(甘肅省博物館)、嘉峪関(魏墓見学)、劉家峡。「敦煌の旅」取材
1976	
1977	7月。小型機でウルムチ、コルラ、クチャ、カシュガルへ。カシュガルからジープでホータンへ。 北京に戻り 、さすが疲れたので病院で鍼を打ってもらうが、そこで「子夜」などで知られる 作家茅盾に出会う 。「シルクロードの旅」取材
1978	8月末から9月にかけて、南昌市から景德鎮へ(江西省)。「中国やきもの紀行景德鎮」取材

「北京を語ることは歴史を語ること」(1991年6月、『北京の旅』文庫版あとがきより)

本書は四人組が失脚し、中国が教条主義の呪縛から釈かれて二年後に執筆した。北京の様相が、これから大きく変わるであろうという予感があった。それだけに、骨格の部分を書いておこうという意欲が、私にペンをとらせたといえる。(中略)

元の時代からかぞえて、北京は700年のあいだ、中国の首都として、歴史と深くか

1966～ 文化大革命
1976.1.8 周恩来死去
.4.5 第一次天安門事件
.9.9 毛沢東死去
.10.6 四人組逮捕
1978.12 改革開放
(鄧小平路線)スタート

わり合ってきた。北京は歴史の町といえる。北京を語ることは歴史を語ることであり、それは語り尽くせないものがある。(下線は編集委員の加筆)

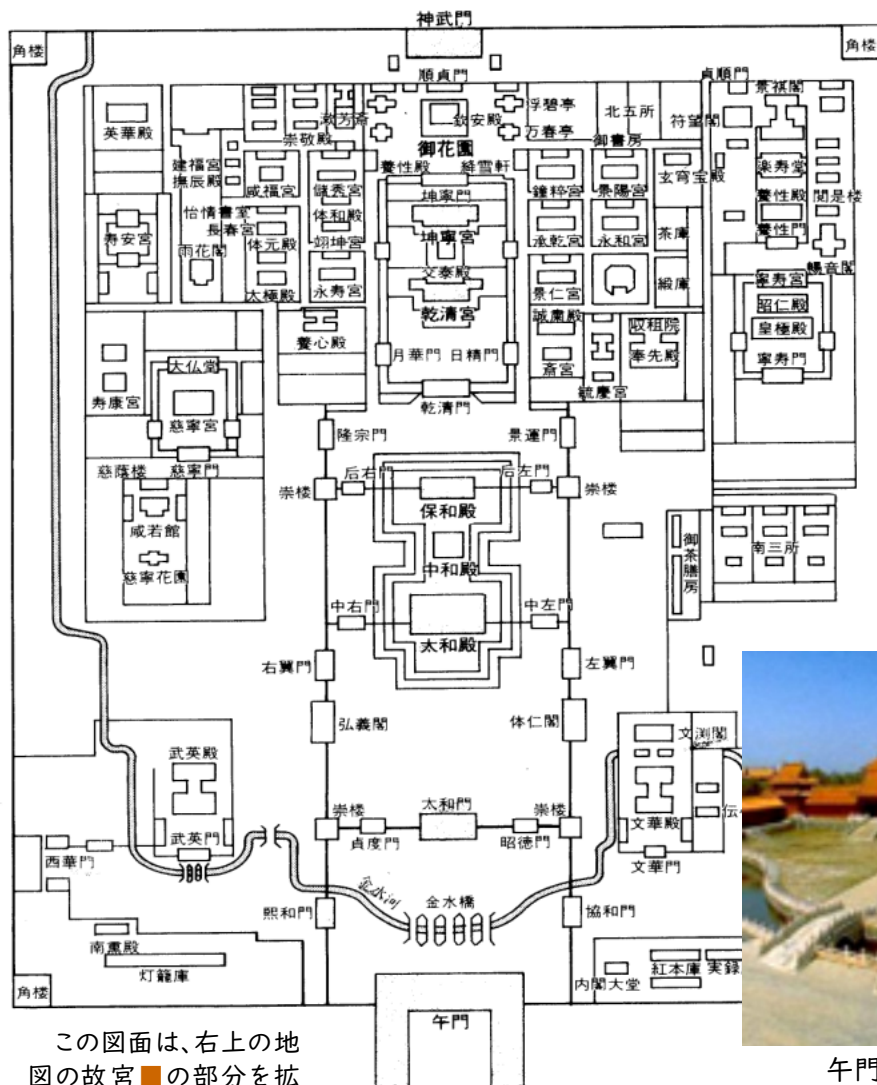
■この時期なので、文化大革命について、例えば、老舎が亡くなった太平湖など、ふれてほしかった。

講談社文庫版表紙→



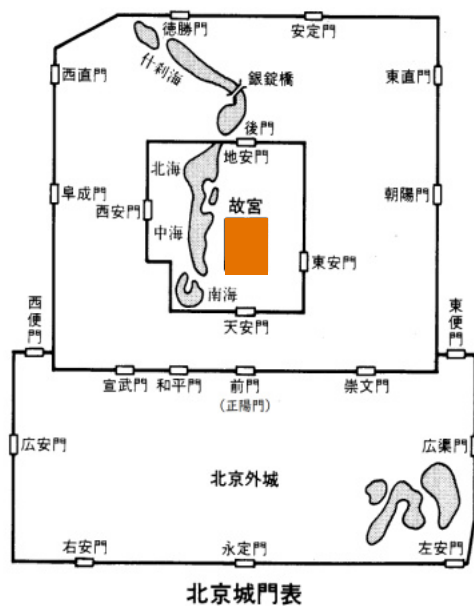
『北京の旅』各章内容

章	目次	内 容 ■はキーワード
第一章	天安門へ	芥川竜之介は毎日新聞社員の肩書で、1921年3月末から7月にかけて訪中。この年は、五四運動の二年後で、中国共産党創立の年です。 起承転結の起と結に芥川を登場させ、五四運動あたりに焦点を当て、北京の近代史を描いています。■義和団事変 使館界 第一次世界大戦勃発 二十一カ条の要求 国恥記念日 曹汝霖 魯迅
第二章	北京小史	陳舜臣さんは、「ひとことで言って、北京は歴史のまちであります」と言い、春秋の「燕」から説き起こし、明・清、そして中華人民共和国までを記述します。春秋・戦国と秦が比較的詳しい。■荊軻(けいか 始皇帝暗殺失敗) 続いて、漢、三国、五胡十六国、南北朝、隋、唐と時代は下っても、この地が辺境で、せいぜい、地方のちょっとした中心地に過ぎなかった。それが、936年、五代十国の後晋の時、遼が燕雲十六州を占領したときから政治的重要性を持てきます(遼では燕の中心都市を「南京」と称した)。次の金では「中都」。更に、元の「大都」、明・清の「北京」(明の永楽帝以後)と続き、中華民国の首都・南京時代を挟んで、中華人民共和国で首都・北京は復活します。■明清交替期の李自成、崇禎帝、吳三桂 辛亥革命
第三章	紫禁城	『北京の旅』掲載の「北京城門表」と「故宮博物院(紫禁城)」を見ながら建物の説明並びにそれにまつわる話、つまり、陳舜臣さんの蘊蓄に耳を傾けるという趣向です。まず、城門の位置、名称です。「紫禁城の正門は午門です。午門を抜けると、塼を敷きつめた広い庭があり、金水河が流れ、五座の大理石の橋がかけられています」、よく知られた光景です(下の画像参照)。続いて、たくさんの建物の説明、話が続きます。

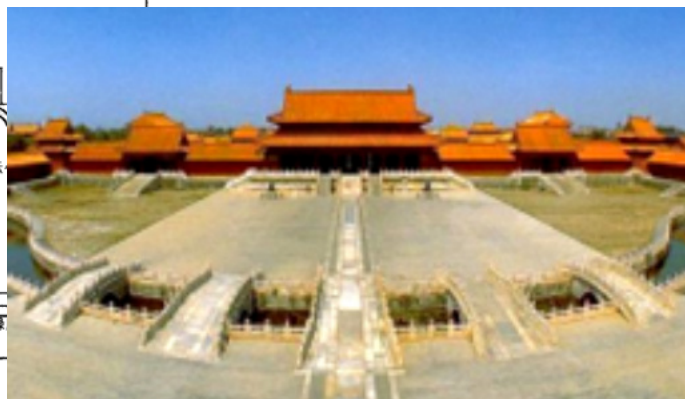


この図面は、右上の地図の故宮■の部分拡大したものです。

故宮博物院(紫禁城)



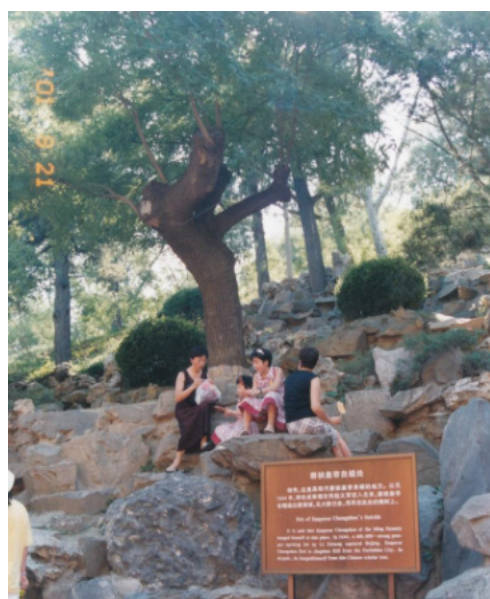
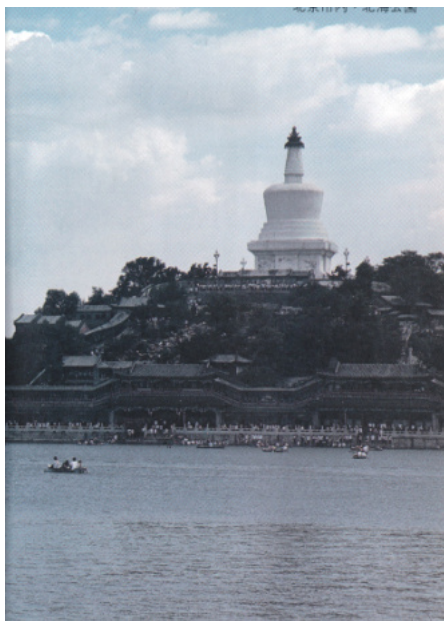
北京城門表



午門を入ったところ 正面奥は太和門です
紫禁城 - 北京 (wikimapia.org)より

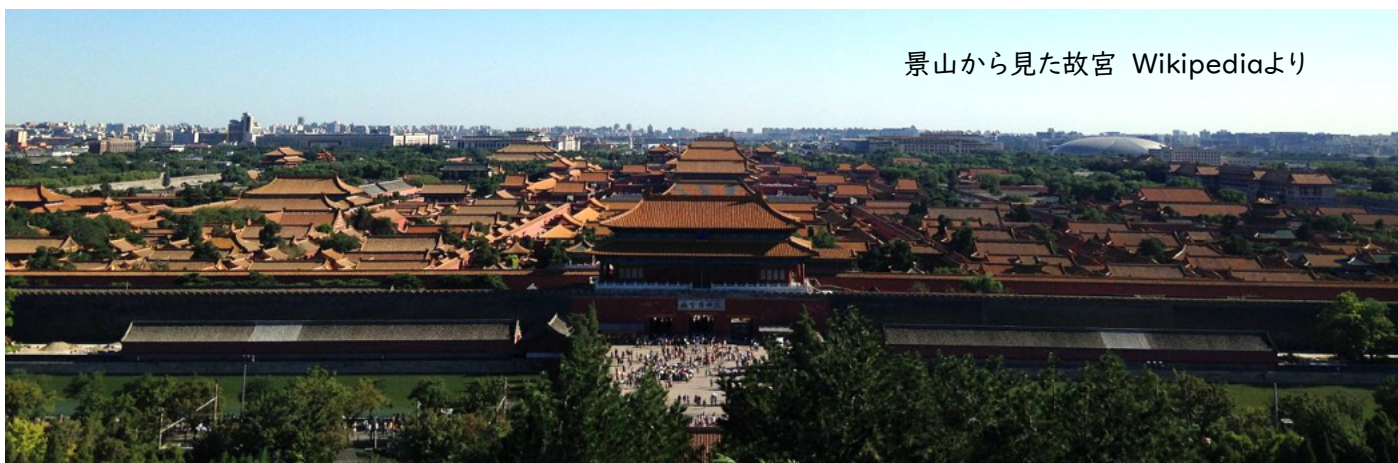
『北京の旅』各章内容(続)

第四章	北海と景山	前ページ掲載の「北京城門表」を見て下さい。故宮(紫禁城)の西、皇城区域内に北海、中海、南海の三つの池水がつらなっています。この内、特に北海は北海公園と称され市民に親しまれています。景山は、「北京城門表」に記載はありませんが、北海公園の東隣り、故宮と地安門の間にある人工の小山です。景山公園と呼ばれ、観光客は、ここから故宮を俯瞰します。この章では、特に明清交替期の北京が詳述されます。 ■北海公園の白塔山(ラマ教の白塔が立つ) 明の崇禎帝、景山で自縊(じい)
第五章	長城と十三陵	長城の話は、特に、秦の始皇帝の時代、漢の武帝の時代、明清交替期が詳述されます。 ■始皇帝の時代の孟姜女物語 武帝の時代の衛青、霍去病 明清交替期の呉三桂と窈窕たる美女陳円円 明の十三陵は、三代永楽帝から十七代崇禎帝まで、十三人の皇帝の陵墓です。数が合わない! その説明に紙幅がさかれます。■南京にある太祖朱元璋の孝陵 土木の変



北海公園の白塔山(『北京の旅』掲載)
陳舜臣さんに同行したご長男・立人氏の撮影

景山にある明の崇禎帝自縊(じい
首を吊って死ぬ)の場所 標識は説明板
編集委員撮影



景山から見た故宮 Wikipediaより

【第五章 長城と十三陵】

明は3代永楽帝の1421年に北京に遷都した。永楽帝はじめ13人の皇帝が眠る北京の「明の十三陵」は有名。

③成祖永楽帝：長陵 ④仁宗：献陵 ⑤宣宗：景陵 ⑥⑧英宗正統帝・天順帝：裕陵

⑦代宗景泰帝の陵はここにはない。北京市西部の金山口にある。

⑨憲宗：茂陵 ⑩孝宗：泰陵 ⑪武宗：康陵 ⑫世宗：永陵 ⑬穆宗：昭陵 ⑭神宗万曆帝：定陵 ⑮光宗：慶陵
⑯熹宗：徳陵 ⑰毅宗崇禎帝：思陵

なお、八達嶺の写真を本号6ページに掲載。

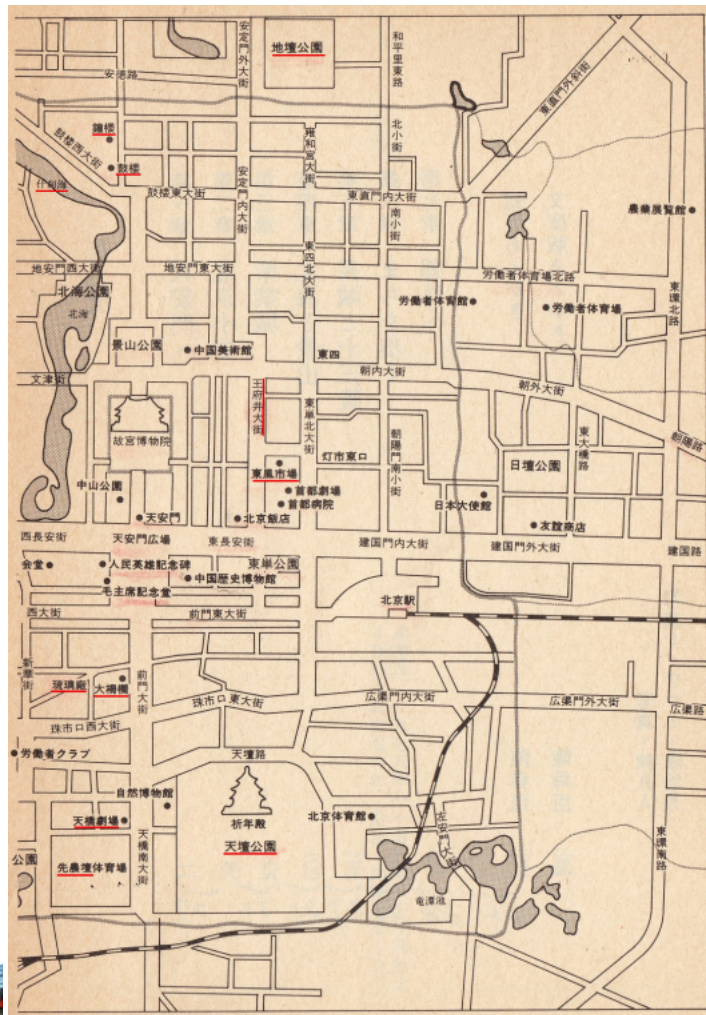
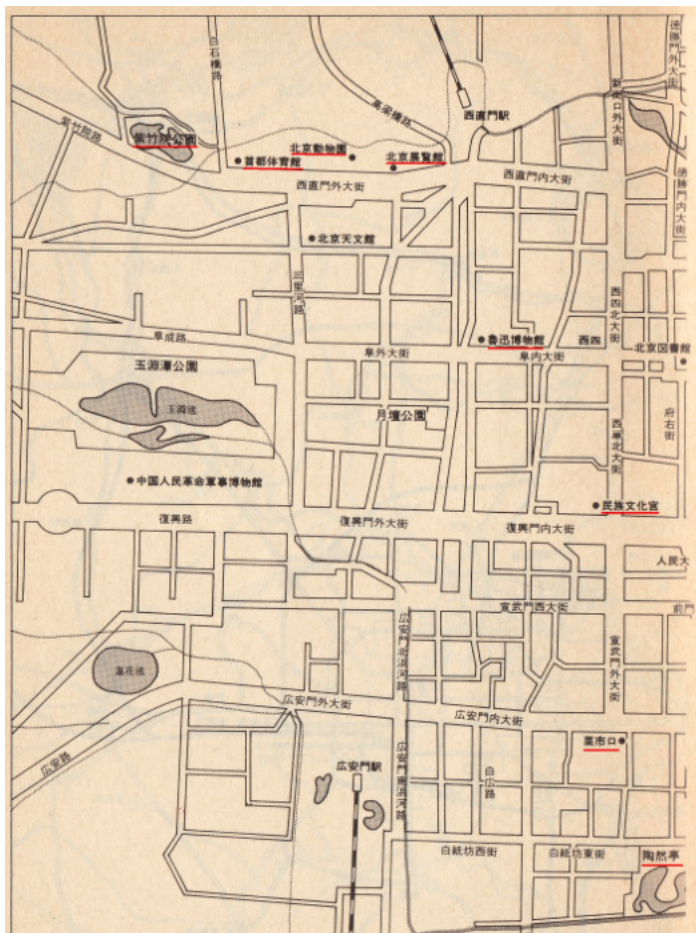
『北京の旅』各章内容(続々)

第六章 まちを歩く

『北京の旅』掲載の地図に記載のある名称には朱線を加筆しました。陳舜臣さんの記述は、北京のまち、東西往き来しますが、ここでは、都合上、まず、同地図の東半分を取り上げます。最初は鼓楼と鐘楼です。続いて、地図にはありませんが、宦官の集まる場所として、道教寺院・宏恩観をあげ、宦官について、長い記述があります。「ついこのあいだまで、いかにも北京らしい独特の雰囲気をもっていたまちだったのです」。あと、地壇、国子監、文廟(孔子廟)、雍和宮、鉄獅子胡同、人民市場、王府井、東風市場、大柵欄、琉璃廠、天橋戲院、先農壇、天壇と続きます。琉璃廠は書画、骨董、古書、法帖、篆刻、文房などの街ですが、陳さんは「私は北京を訪れて、琉璃廠に立ち寄らなかったことはありません」と言い、最も有名な店として、「榮宝齋」の名をあげています。この章の最後は、「全聚德」の北京烤鴨です。■孫文、鉄獅子胡同にあった顧維鈞邸で死去 梅原龍三郎「雲中天壇」

上掲地図の西半分に移ります。まず、民族文化宮で、魯迅博物館、北京展覽館、北京動物園、首都体育館、紫竹院公園、積水潭(什刹北海)、菜市口、陶然亭と続きます。魯迅博物館のヶ所では、魯迅についてのほか、「北京には、紹興出身者が少なくなかった」「紹興出身者がとくに多かったのは高級官僚の秘書でした」「天下のことは紹興人にきけといわれたほどです」と記述している。もう一つ、菜市口のヶ所、ここでは、「清代の刑場でした」と記し、陳さんの筆、戊戌六君子の処刑に言及、特に譚嗣同の記述に力が入ります。

■積水潭(什刹北海)の畔の邸が『紅樓夢』のモデルとも



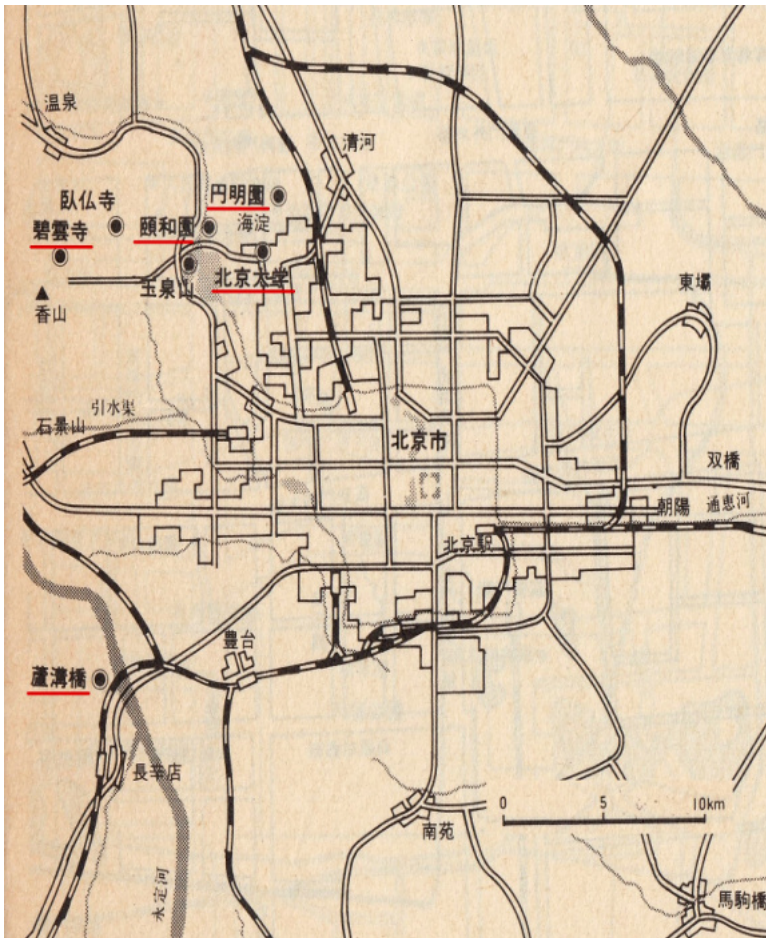
左の画像は「簡素にして愛すべし」と芥川竜之介がほめた陶然亭です。「康熙三十四年(1695)、江藻という人物が建てたものです。亭名は白居易の詩、
更待菊黄家釀熟 与君一醉一陶然
から採ったといいます」

(画像は<http://www.trtpark.com/>より)

『北京の旅』各章内容(続々々)

第七章 郊外へ

冒頭、文教地区として、民族学院、北京大学、精華大学などに言及しますが、この章の中心は頤和園と円明園です。「頤和園といえば、誰でも西太后が海軍の予算を流用して造ったという、有名なエピソードを思い出すでしょう」。ということで、西太后という人物及び、このあたりの政治状況が詳述されます。次は円明園です。円明園は、雍正帝が康熙帝からもらった廃園を改造、立派な庭園にし、更に次の乾隆帝が増営したもので、金銀財宝、書画、骨董、貴重な善本のコレクションがおさめられていましたが、第二次アヘン戦争のとき、英仏連合軍によって略奪、破壊されました。そのいきさつに多くの紙幅がさかれます。続いて、頤和園の西に位置する碧雲寺です。孫文は1925年3月12日、鉄獅子胡同で死去しますが、その遺体は、五年間、碧雲寺に安置され、その後、1930年5月、南京の中山陵に遷されました。あと、北京原人の遺骨が発見された周口店、日中戦争の発端となった蘆溝橋（陳さんの原文は蘆溝橋）などの記述があります。



頤和園(いわえん) 今は市民の憩いの場
編集委員撮影



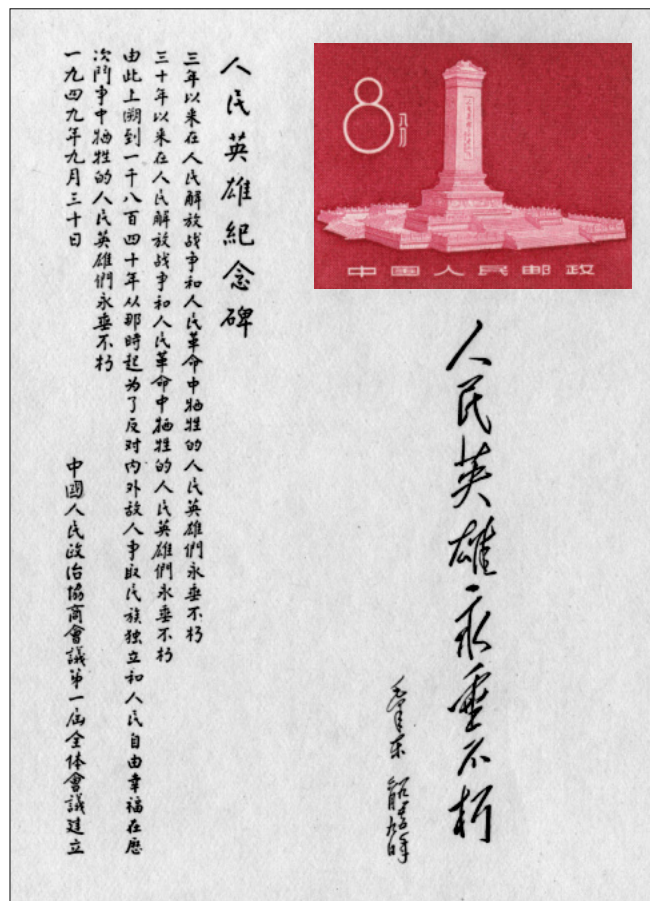
圓明園の廢墟
陳舜臣さんに同行したご長男・立人氏の撮影



左は永定河に架かる蘆溝橋
(『北京の旅』では 蘆溝橋)

画像は pacifacafe.com/china-rokoukyou より

『北京の旅』各章内容(補足)



第一章3 補足

天安門広場にそびえる人民英雄紀念碑

碑面表の八字は毛沢東の筆跡で「人民英雄永垂不朽」、また、裏面は周恩来の筆で、紀念碑建造の由来が記されています。(画像はWikipediaより)

陳舜臣さんは、毛沢東の字を「なにものにもとられない奔放そのもの」と言い、周恩来の字を「一画一画をゆるがせにしない、折目正しい楷書」と言っています。

第六章7 補足



「私たちは天壇といえば、画集でみた梅原竜三郎の、あざやかな「天壇」を思いうかべるでしょう。じつは私も実物を見る前の梅原の絵の印象が強すぎて、それを振り払うのに苦労したものです」(梅原の絵は<https://aucview.aucfan.com/>より。写真は『北京の旅』より。ご長男陳立人氏撮影)

第五章2 補足



八達嶺付近の長城
編集委員撮影